2023(令和5)年度　学校推薦型選抜　基礎学力検査

文学部　人間関係学科
小論文

【注　意】

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は13時00分から15時00分まで(120分間)です。
3. この問題冊子は表紙以外に5ページあり、解答用紙は2枚あります。
4. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
5. 解答はすべて解答用紙の解答欄に記入してください。
6. 解答用紙の氏名欄を除き、受験者本人の特定につながるような氏名、住所、学校名等は記述しないでください。
7. 解答用紙を持ち出してはいけません。持ち出した場合、試験をすべて無効とします。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

次の課題文を読んで、設問に答えなさい。

今では「友人としての家族」や「家族としての友人」といった表現が広く使われるようになったが、そこには、個人の自律性への欲求と、家族への帰属による安心感との緊張関係を見てとれるだろう。家族関係がより複雑で輪郭のあいまいなものになるにつれて、「友人」と「家族」という語の結びつき方も変化してきた。現代における親子の紐帯は、かつての拡大家族における子どもとの関係に比べて、精神的な側面を重視するようになっており、そのことが近代的な核家族の絆の信頼性を担保している。実際、1970年代から子ども中心型の家族へと移行するなかで、子どもと友人のような関係をもつこと—「親密性の開示」—が強調され、子どもが精神生活の基盤に位置づけられることになった。人びとは今では、家族成員と友人のようなつながりをもつことを期待するようになっている。また、離婚や別居が一般化し、親族とのつきあいも薄れており、そのため、家族とのつながりに乏しい人びとにとっても、友人はより重要な存在になりつつある。対等性と相互の自己開示という友情の属性が、現代の家族関係を近代化し、刷新するようなはたらきをしていることは、実証研究からも裏づけられている。

So are friends becoming more important than family and wider kin[1] during late modernity, or are family and friendship somehow converging[2], in terms of expectations and behaviour? In an important (ア)recent empirical study of family and friendship in the United Kingdom, Pahl and Spencer interviewed a wide range of individuals and families about the role of friendship in family life. They found evidence that friends are taking over some of the functions of family, with friends now more important in support networks than in the past. A blurring[3] of the categories of family and friends is being experienced with individuals becoming more selective in choosing the kin with whom they socialize and keep

[1] kin 身内・親族
[2] converge まとまる・収束する
[3] blur あいまいになる

obligations[4]. This pattern was exemplified by a criss-crossing of both friendship and family roles and by the language respondents used.

「身内」と「友だち」という語は、互換的に用いられる場合でも、異なるニュアンスを帯びていた。家族のだれかを「友だちみたい」と言うような場合には、「友だち」という語で表現されたその家族関係は、肯定的で価値のあるものとして扱われていた。友人が「身内」と呼ばれる場合にも、同様に、その関係が良いもので、強い絆であることを意味していた。しかし、ある友人関係が「義務」的な関係とみなされて「家族みたい」なものと形容される場合には、「家族」という語は侮蔑的な意味で用いられていた。このように、家族と友人の境界は敷居の低いものになっているのだが、「友だち」という語が好ましい家族関係を形容し、その価値と魅力を表現するために用いられるのに対して、逆に「家族」が友人関係を形容する場合は、義務の感覚によって縛り付けられた否定的な意味をもつのである。

Pahl and Spencer found that the use of the term (イ) 'family as friend' covered all kinds of family members except grandparents. Family members were seen as analogous[5] with friends if the relationship was perceived as chosen rather than a duty, or if there were strong emotional bonds. Importantly, members of family were also viewed as friends if the relationship involved disclosure[6]. The role of confidant is so significant that it acts as a determinant of the quality of friendliness of the relationship. Friends were regarded as 'family' if the relationships had been tested by difficulties and sustained by a joint commitment to the continuation of the friendship or if the friend had provided emotional or other support over time. Friends were also viewed as family if the pair had known each other since they were children or if the friend was considered 'one of the family' by being invited to family events.

パールとスペンサーによれば、打ち明け話をすることは、家族と友人との交流形態としてきわめて重要な意味をもっている。調査対象者たちは、家族や友人、性的パー

---

[4] obligation 責務・責任
[5] analogous 類似している
[6] disclosure 開示

トナーに打ち明け話をしていたが、親はほとんどその相手に選ばれていなかった。親を動揺させたり批判されたりするのが恐いからだ。ジェンダー差という点では、女性は男性よりも打ち明け話のできる相談相手が多かった。男性の場合は、労働者階級よりも中流階級の方が多くの相談相手をもっていた。これは、労働者階級の男性は感情的なサポートをより妻に頼りがちであるという先行研究を裏づけるものでもある。男性の友人関係に関する研究によれば、男性は仲間の男性よりも女性に精神的なサポートを頼りがちであり、異性愛男性が女性パートナーに頼る場合にはこの傾向がより顕著に見られるという。パールとスペンサーの知見のなかでも重要なのは、友人関係が家族関係よりも心理的な肯定感をもたらすということだ。それは、友人関係が所属するというよりむしろ選択する関係性であることによる。このことはギデンズの「純粋な関係性」についての筆者の解釈を補強するものと言えるだろう。親密な関係性における選択と対等性は、実際には必ずしも達成されていないが、関係性のあるべき姿として願望され、高く価値づけられている。関係の選択性は、今では強制的な関係に代わるものとしてますます特権的な位置を占めつつある。

親族の重要性が薄れ、また、親族のなかでも友人になることができ、信頼と満足ある関係を取りもてる相手だけが選ばれるようになったことで、友情の価値はよりいっそう高められつつあるように思える。これは、友情がより支配的な関係となり、親族を価値なきものにしつつあることを意味しているのだろうか? ジェミソンは「よき友こそすべてか」と問いかけ、「必ずしもそうではない」と答える。彼女がきわめて重要なポイントと考えるのは、「共同体」から「親密性」へという歴史的な移行によって、私たちが友人と親族を類似した関係性ととらえるようになったことであり、両者をともに「感情の共有にもとづく共同体の潜在的な構成員とみなすようになった」ことである。彼女はまた、これら二つの関係性の重要な相違点を強調する。たとえば子どものいる家族の場合、育児期の母親は男性パートナーに継続的に依存する状態に置かれることになるだろう。そのような状況を考慮に含めることなく、家族関係における友情が強調されるならば、そこでの権力と葛藤が巧妙に隠蔽(いんぺい)されてしまう。それによって、そのような関係性に何が求められ望まれているかという主観的な経験とは区別すべき、構造的な権力関係がぼやけてしまうのである。

家族と友人の関係についての主観的な経験と願望に注目した、パールとスペンサー

の研究は、「友人のような関係」が今日もっとも求められる関係性を表象するものとなっていることを明らかにするものだった。こうした友人的な関係性は、親族の紐帯に取って代わるというより、むしろそれを強化するように作用している。友情という概念は、その不定形性にもかかわらず、家族的結束のメタファとして用いられている。このことは、友情という概念のもつ意味と諸特徴が、欧米社会において求められるべき近代的な関係性として位置づけられるようになったことを示すものだろう。

（Chambers, D. *New social ties: Contemporary connections in a fragmented society..* および、デボラ・チェンバース『友情化する社会 断片化のなかの新たな〈つながり〉』による。ただし、出題に際し本文の一部を改めた。）

問１　下線部（ア）の調査で明らかになったことを、課題文の内容に則して具体的に説明しなさい。(40 点)

問２　下線部（イ）とは対照的に、友人が家族のように捉えられる条件について、課題文の内容に則して具体的に説明しなさい。(40 点)

問３　課題文で述べられている友人のような親子関係は、子どもの成長にどのような影響をあたえるのだろうか。そのメリットとデメリットを対比させながら 800 文字以内で述べなさい。(120 点)